

ローマの信徒への手紙 3章 21-26 節

「聖書のみ！信仰のみ！恵みのみ！」

10月31日は「宗教改革記念日」です。宗教改革で一番大事な「信仰のみ」。これについて、宗教改革を覚えてお話ししたいと思います。カトリック教会は、サン・ピエトロ大聖堂の建築資金を調達するため、贖宥状(免罪符)の販売を推進します。しかしローマ・カトリック教会の行き過ぎたあり方に疑問を呈し、聖書を読むことに励んだのが、当時、ヴィッテンベルク大学の神学教授であったマルティン・ルターでした。公開質問状として、教会の扉に「95か条の提題」を貼り出します。それが1517年10月31日。これ以降多くの人々が提題を読み、宗教改革運動の引き金となりました。この時のルターを突き動かした原動力。それは、3章23～24節にある御言葉で、「信仰義認」の確信を得たのです。

21節の「ところが今や」。今この時に全く新しい時代が始まったのだ、とのパウロの力強い宣言です。どんな時代が始まったというのでしょうか。ローマ書1章18～今日の箇所まで、全ての人は神の前に罪人であるということをパウロが書いています。イスラエルと神との契約によって救いへと招かれる。それが旧約的な信仰の道筋でした。しかしバビロン捕囚後、律法と言葉による礼拝を中心として信仰の組み立て直しが行われました。ところが、律法主義に陥り、人間が人間を縛り、管理するための律法となってしまう。こうした状況の最中に、御子イエスが登場し、その福音、十字架と復活とによって、これまでとは全く違った新しい世界・時代が出現した、この出来事をパウロは21節以下に語り出しました。この大いなる変化を、パウロは「神の義」という表現で明らかにしているのです。

「神の義」とは旧約聖書に「まっすぐであること」「正しい状態にあること」です。パウロは、旧約聖書の時代から、律法によってはついに到達し得なかった「神の義」、神とのまっすぐで正しい関係が、イエス・キリストにより、この方を信じることで実現されるのだとし、その理由を続く23～24節に語っています。人間は自らをもってしては、神さまとの関係を整えることはできません。それはただ恵みのみとして神さまの側から与えられるもので、そこにイエス・キリストが十字架上で血を流して死んでくださったことが深く関わっているというのです。人間は羊や牛を自分の代わりに捧げて、神との結びつきを整えようとしたり、神から赦しや祝福を得ようと祈り願ってきました。しかし、この宗教的あり方をキリスト教は大転換しました。神が御子を、もっと言えば神ご自身を献げて、人間を執り成し、贖い、救いへと導こうとされたというのです。これをパウロは「神の義」と表現しました。これほどまでに神から先んじて示されている愛と贖いを深く感謝して受けとめる、そこにキリスト教の真実の「信仰」が出発していくのだと、パウロは宣べ伝えています。

神に贖われ、救われた者として、喜びと感謝をもって日々の生活にキリスト者として生きよ、との勧めです。キリスト者として、こうしなければならない、こうしてはならない、そんな縛りや律法から完全に自由になって、神が喜ばれるあり方へと生き活きと進んでいく、それが「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえ」として献げること、それが「なすべき礼拝」だと言うのです。与えられている大いなる神の恵みに気づいて、それを感謝して受け入れ、真実な「礼拝」への歩みを、それぞれのあり方・生き方で進んでいきたいと願います。